

大学教育学会 課題研究活動報告書 (2019 年度)

提出日 2020 年 3 月 6 日

報告者 深堀 聰子

課題研究テーマ	学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容
代表者 (所属)	深堀聰子 (九州大学)
メンバー (所属)	深堀聰子 (九州大学), 松下佳代 (京都大学), 中島英博 (名古屋大学), 佐藤万知 (広島大学), 田中一孝 (桜美林大学), 畑野快 (大阪府立大学), 斎藤有吾 (新潟大学), 長沼祥太郎 (九州大学), 伊藤通子 (東京都市大学)
担当理事	松下佳代 (京都大学)
コメンテーター (所属)	濱名篤 (関西国際大学)
実施した活動	<p>本課題研究では、教育のデザインと評価にかかる大学教員の専門性を鍛えることを通して、大学組織はいかに学修者本位の教育への転換を果たし得るのかを明らかにすることを旨とする。すなわち、①学修成果アセスメント・ツールの開発・共有・活用支援体制を整備することで、大学教員の「エキスパート・ジャッジメント」はいかに涵養され、②大学組織におけるいかなる条件が整ったとき、大学教員は変容のエージェントとして、「学習システム・パラダイム」への転換を導き得るのかを明らかにすることを研究課題としている。</p> <p>2019 年度には、学修成果アセスメント活用支援に関する米国と日本の先駆的事例に関する基礎調査を実施し、その成果は本学会第 41 回大会ラウンドテーブルにおいて報告した。この基礎調査の成果を踏まえて、概念整理と研究枠組みを精査するとともに、大学教員の変容を基盤とした大学組織の変容のメカニズムを捉える有望なアプローチの一つとして着目することとなった PEPA の取組の理論と課題の整理を行った。さらに、「エキスパート・ジャッジメントの涵養」を捉える指標を開発し、「学習システム・パラダイムへの転換」を捉える枠組みも同定した。</p> <p>2019 年度の活動の中で、新たに 2 名のメンバー（伊藤通子会員、長沼長沼祥太郎会員）の参加を得た。両名とも、研究と本務を通して、本研究に深く関わる活動を展開しておられるため、本課題研究の進展にとって大きな貢献が期待される。</p>

<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学教育学会第41回大会ラウンドテーブル（2019年度6月2日@玉川大学）「学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容－先駆的事例の分析－」 ● 『大学教育学会誌』第41巻第2号〈ラウンドテーブル報告〉 深堀聰子・松下佳代・中島英博・佐藤万知・田中一孝・畑野快・斎藤有吾「学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学の組織変容－先駆的事例の分析－」 ● 大学教育学会2019年度課題研究集会課題研究シンポジウムⅢ（2019年12月1日@エリザベト音楽大学）「学修成果アセスメント・ツール活用支援を通じたエキスパート・ジャッジメントの涵養と大学組織の変容－組織変容の要件に着目して－」 ● 大学教育学会誌第42巻1号〈課題研究シンポジウムⅢ〉 深堀聰子「大学教員の『エキスパート・ジャッジメントの涵養』と大学組織の『学習システム・パラダイムへの転換』－研究課題と概念整理－」 斎藤有吾・長沼祥太郎・畑野快「エキスパート・ジャッジメントを捉える指標」 中島英博「『学習システム・パラダイム』への転換を捉える枠組み」 松下佳代「プログラムレベルと科目レベルの評価をつなぐ－PEPAの理論と課題－」 田中一孝「今後の展望－濱名篤史氏によるコメントとディスカッションを踏まえて－」
<p>残された課題</p>	<p>2019年度の活動を通して開発した研究枠組み、及び「エキスパート・ジャッジメントの涵養」を捉える指標と「学習システム・パラダイムへの転換」を捉える枠組みを援用しながら、2020年度は大学教員の変容を基盤とした大学組織の変容に取り組む大学の調査に注力する。</p>